



SUSAP2020SPRING

パシフィック大学プログラム

2020/2/21～3/16

参加者プロフィール



藤井琢也（団長）
経済学部経済学科 3 年

アメリカの文化、習慣の違いを実際に体験し、見識を深めることで様々な価値観を得たいため。また、慣れない環境への対応力を高めて、どんな場所でも自立できるようにするために留学を決意した。



石崎文音（副団長）
農学部応用生物科学科 2 年

台湾での留学生生活を踏まえ、より実践的な語学力を磨きたいと思っていたため。また、米国での食文化や環境に対する意識、大学における学習体系に興味があり、留学を決意した。



谷崎俊介
理工学部知能情報システム
学科 2 年

英語運用能力の向上だけでなく、大学の教育環境や学内の生活を直に体験したいと考え、本研修に参加した。



江口史
芸術地域デザイン学部
芸術地域デザイン学科 2 年

佐賀大学ではできない服飾のデザインの勉強をいつか留学して学びたいと思っており、その留学先にアメリカを考えているので、このプログラムに参加した。



大坪輝
教育学部学校教育課程 2 年

将来英語教師、もしくは英語を活かした企業への就職を考えており、その際に海外での経験は必ず自分の将来の糧になると考え留学を決意した。



西江彩乃
教育学部学校教育課程 2 年

他国で様々な人との交流を通して自分の価値観を広げ、将来小学校の教師になった際にその経験を活かしたいと思ったため本プログラムへの参加を決意した。



宮崎真美
農学部生命科学科 2 年

就職や研究を海外ですることを考えているので語学も含め海外での勉強を目的に留学を決意した。



佐藤将也
経済学部経営学科 1 年

中学生の時から英語に興味があり、海外研修を通して自分の英語力を高めたかったから。



伊東周昌
理工学部応用化学コース 1 年

将来、海外で専門分野を生かした形での就職を望んでいるから。



村島瑞葵
教育学部学校教育課程 1 年

実際にアメリカに行くことでネイティブの英語に常に触れながら英語力と英語に対するモチベーションを向上させるために本研修に参加した。



豊原本奈
医学部医学科 1 年

英語能力を上達させ、さらにアメリカの文化を学ぶために参加を決意した。



大内萌々香
経済学部経済法学科 1 年

英語の力の向上と多国籍国家であるアメリカに滞在して様々な異文化を学ぶことを目的に本プログラムに参加した。

プログラム概要

【期間】2020年2月21日～3月16日（25日間）

【留学先】パシフィック大学

2043 College Way, Forest Grove, Oregon

【内容】多文化環境の中で（学術）英語の運用能力を高め、現地学生や地域の人々との交流を通して、アメリカの社会・文化・大学生活などを学び、理解することを目的としています。

パシフィック大学について

パシフィック大学は、オレゴン州フォレストグローブに位置し、学生数3855人(学部1958人、大学院1897人)で、1851年に創立した歴史ある私立大学です。

そして、人文、芸術、理学、音楽、教育、法学、歯学など様々な分野が開講されており、特に検眼学の分野ではアメリカでもトップクラスの教育を受けることができます。

授業は平均19人という少人数で行われており、学生と教師が双方向のコミュニケーションを図ることができます。

授業

月・水・金は9:30～11:20までListening & Speakingの授業で、13:00から14:50までGrammarがあり、火・木は9:40～12:30までReading & Writingの授業がありました。

Listening & Speakingの授業は、英語を積極的に用いて、グループで話し合う活動が主で、プレゼンテーションなども行いました。Grammarは、事前のテストの結果をもとに、クラスが二つに分けられ、基本的な文法を用いて物語を自分たちで作るなどして学びました。Reading & Writingの授業は、毎回宿題で本を読み、同じ本を読んでいる人のグループで、本についてのディスカッションを行いました。どの授業も先生方が丁寧に教えてくださり、わからないところを質問する時間もあったので、英語運用能力の向上につながったと思います。

課題はオンラインで出されるものと、プリントを解いてくるものがあり、少なくともなかったです。課題で分からなかったところを聞く時間もあるので、きちんと準備しておく必要があります。

授業は、少人数で行われるため、ほかのクラスメイトとも仲良くなることができ、良い雰囲気の中で学習することができました。

バディとの交流

今年のこのプログラムにはバディが3人いました。バディは日本に関心がある方々で、私たちの買い物に付き合ってくれたり、寮生活のサポートをしてくれたりしました。バディ以外にもジャパンプラブのメンバーの方々とたくさん交流がありました。日本語が通じる方が何人かいました。英語では伝わらないような深い質問をしたり、英語に関する質問をしたりして盛り上がりました。日本に帰っても連絡を取り合うほど仲良くなった人もいたのでよかったと思います。

ボランティア

このプログラムでは5つのボランティア活動をしました。フードバンクの手伝い・リサイクル品の整理・小学校訪問・木植え・Mercy Corps 訪問の5つです。

フードバンクの手伝いでは、貧しい方々に配る食べ物とその食べ物を置くテーブルの運搬・設置を行いました。

リサイクル品の整理では、リサイクル品を配布している団体のお手伝いとして、古着や使わなくなった電化製品の仕分け・整理を行いました。

小学校訪問では、アメリカの小学生に日本語で数字や名前の書き方を教えてあげました。小学1・2年生くらいなので、英会話の練習相手として不足ありませんでした。

木植えでは、私たち以外にも地元の学生・社会人の方々が参加し、約80人で空き地に木を植えました。2～3人ずつのグループに分かれ、新しい友達ができ良い英会話の練習となりました。

Mercy Corps 訪問では、世界の自然災害・自然危機の解決に立ち向かっているMercy Corpsという企業を訪問しました。ビデオやクイズを使ってMercy Corpsの活動内容について学びました。

アメリカでの生活

○交通手段

交通機関はバスとブルーラインと言う電車のようなものがありました。タクシーはポートランドではみかけたがフォレストグーローブではあまり見かけませんでした。黄色のタクシーは良いが白いタクシーは乗ってはいけないと聞きました。

2.5 時間で\$2.5 一日中乗るときは\$5.0 でバスや電車の交通機関は乗り放題でした。停留所は短い間隔であるのでとても便利で安く利用できます。まだバスは 24 時間走っていると聞いた。近くのスーパーは歩いて片道 15 分、少し遠い大きなスーパーは歩いて片道 30 分以上かかりました。大きなスーパーは 2.5 時間分のチケットを買ってバスで行く方が良いと思います。ポートランドまではバスと電車を使って 1 時間ほどかかりました。夜はバスや電車内の治安が悪くなるのであまり夜遅くに乗るべきではないと思います。

○市馬・物価

オレゴン州は税金がないです。牛乳やパンなどは比較的安かったが、レストランや外食をするときは約\$10 はかかりました。\$1.0 ショップがありました。コップや皿などはここで買うといいと思います。洋服などは日本とあまり変わりませんでした。ブランドものは税金がないので少しだけ安く買う事ができます。

○食事

大学周辺にはハワイ料理やアメリカン料理、メキシコ料理、中華料理、日本料理などありとても豊富な種類がありました。基本的に量が多かったが、お持ち帰りのボックスをもらう事ができるので頼んでみるといいと思います。学食はバイキング形式で野菜、お米、デザートなどがあり、外食をするよりも安く食べる事ができます。朝昼夜開いているので便利です。タッパのようなものに入れて持って帰ることもできるし、りんごやオレンジが置いてあるので持って帰れます。また他の学生とも交流できるいい場だと思います。近くのラーメン屋さんは日本語を少し話せる方がいてとてもフレンドリーに話しかけてくれるのでぜひ行ってみて欲しいです。朝ご飯はスーパーの近くまで行くとパンケーキやオムレツを食べれるところがありました。近くにいくつかカフェがありま

す。ファストフード店は 15 分ほど離れたところにあります。お酒はとても厳しくて 21 歳からでパスポートを見せないといけないので注意してください

○寮

寮には冷蔵庫や電子レンジ、トースター、洗濯機、乾燥機がありお風呂はシャワーのみでバスタオル、ハンドタオル、ハンガーが用意されていました。洗濯機、乾燥機は無料で使えたので洗剤だけあればいいと思います。暖房設備も整っていました。

まとめ

以上にあるように日本とは違う授業のスタイルや宿題、イベント、ボランティアをたくさん体験できるので積極的に自分から行動してみるといいと思います。分からない事があつたら大学に日本の留学生に対応してくれる先生がいるのでたくさん色々な事を聞いてみてください。私たちの留学が良いものになるように相談に乗ってくれます。またアメリカに留学している日本人もいるので喋りかけてみてください。たくさん手助けをしてくれました。現地の人たちはみんなフレンドリーなので最初は勇気がいると思いますが、積極的に行動してみると日本とは違う体験ができると思います。

「様々な価値観から学ぶもの」

経済学部経済学科 3年 藤井琢也

私がパシフィック大学プログラムに参加しようと思った理由は海外に1度も行ったことがなかったため、海外の文化、習慣の違いを実際に体験し、様々な価値観を得るためである。聞いたことや知っていることを多くあっても実際に肌で感じることでより質の高い経験になると考えた。

まず、今回アメリカに行き、実際に生活してみて現地に暮らす人々との習慣や行動の違いをいくつか感じた。

実際に生活してみて私の当初のイメージと違ったところは「感謝」の部分である。日本人は「ありがとう」などの感謝の心を持って人に接しているイメージを持っていて、アメリカはそこまでないように思っていた。しかし、全く違うことがわかった。それを感じた行動があるので説明していく。

まず、ドアがあるところを通る際、先にドアを開け後ろに続く人たちを通してあげるといった行動である。アメリカにいる間、多くの人が自分のためドアを開けておいてくれて、逆に自分がドアを開けておくといわず Thank you と言ってくれた。日本ではあまり見られない光景だと思う。日本人はよく親切だと言われるのを聞くが、日常生活の中でお礼を言う回数はアメリカの人々の方が多いように思った。また、バスで車椅子の方が乗ってきたときに運転手だけでなく乗っている人もすぐに手伝っている姿を見た。これらはとても小さなことかもしれないがこのような行動の積み重ねが日常的な習慣になっているのだと思った。

アメリカと日本の習慣から私はある気づきを得た。日本人はご飯を食べる時に「いただきます」「ごちそうさまでした」などの感謝の言葉を述べる。この「いただく」とは自然災害の多い日本に食べ物を得られることによって、神様に感謝を表す。私が考えるのは、日本人を見えないもの、無形なもの、要は内に感謝することが多く、アメリカではしてもらったことや人、要は外に感謝することが多いのではないかと考えた。そのため、このような習慣が日本人はシャイであまり自分のことを表現せず、一方、フレンドリーな人が多いアメリカの独特な文化を作り上げているのではないかと考えた。

また、日本とアメリカの働き方にも大きな違いがあると思う。まず、お店に入ったら必ずと言っていいほど Hello と調子を聞かれる。これに答えたり、相手の調子を聞いたりすることで会話が生まれることもある。日本でも「いらっしゃいませ」と挨拶をするが他人行儀な感じがする。もちろん、どちらが正解というわけではない。日本でいきなり体の調子を聞いたりすると逆に不信感を持たれる可能性もあるのでそれぞれに合った文化だと思った。しかし、私が日本も見習った方がいいと思ったのはアメリカでは働いている人が楽しそうに生き生きしていることだった。例えば、店員さんが歌いながら働いていたり、CA が踊りながら働いていたりしていた。日本では考えられない行動ではあるが働いている人の楽しそうな笑顔を見ていると働くことの本質をついている気がした。「お客様が神様」という日本のサービス精神も大切だが、自分が心から楽しみながら働くことが現在日本の働く現場において足りないことかもしれないと思った。

続いて、私が感じたのはアメリカのボランティア精神が非常に高いということである。私たちは今回のプログラムで様々なボランティア活動を行った。例えば、Tree Planting（環境保護のために木や花を植える活動）というボランティアではパシフィック大学の生徒だけでなく一般の方々も参加し約 80 人の参加者がいた。この Tree Planting では 2〜3 人のバディを組んで約 3 時間活動するので英語運用能力向上にも繋がるものであった。

なぜボランティア精神が高いのかについて調べた。その理由として歴史的背景がある。アメリカ人は、植民地時代から団結して互いに助け合ってきた。新大陸で植民地を開拓した人々にとって最優先事項はみな同じで、生き残ることであった。物理的に見れば、土地は荒野であり、社会的な組織機構もなかったため協力し合うかどうかが生死を分けた。そのため、市民が自ら問題を解決しようとするのがアメリカ流であり、Independence=自主独立がアメリカの大切な価値観である。ここで私が考えたのは日本とアメリカではボランティア活動の考え方が根本的に違うと思った。日本は善意を持って誰かのために行う奉仕活動であり、アメリカでは社会のために個人が自発的に行う活動という考え方の違いが生まれているのではないかと感じた。

次に大学の授業について振り返っていきたいと思う。授業内容としては英語のリーディング、リスニング、ライティングそしてスピーキングの4技能を満遍なく学習した。日本で英語を学ぶ大きな違いとしては、授業を構成する全てのことが英語で行われていることである。さらに、ほとんどの授業で毎回2~4人のペアを作って授業が進められる。そのため、ただ聞くだけの授業にならず、発言やディスカッションを積極的に行う授業になるためより英語を使う機会になった。また、担当教員の方もとても気さくな方で、基礎的な部分に対し例を出しながら説明してくれた。今回はプレゼンテーションやエッセイを書くことが多く、そのときによく注意されたのがFirst, Second, Finallyなどのtransitionの単語を使うことである。これは英語に関わらず日本語でも同じことを言えるので再確認できたことはよかった。

最後に、私は次に4年生になり社会人になっていくがその前に日本以外の価値観を知れてよかったと思う。慣れない環境でありながらどうにか対応していくこと、働くこと、人のために行動することなど日本に居ては分からなかった価値観を知れて、そして大きな経験ができたことがこの短期留学に行って良かったと思う。この経験・価値観を活かして大学生活、社会人生活をより豊かにしていきたいと思う。



ハイキングでの一場面

留学して見えたアメリカ人の国民性

農学部応用生物科学科2年 石崎文音

私がアメリカへの短期留学を決意したのは、異文化理解、語学力の向上、そして自己の価値観の拡大を図るためでした。実際に海を越えてアメリカで1ヶ月生活する事で、日本で学生生活を送るだけでは決して体験できない貴重な経験をする事ができたと思います。

渡米して1番に体感したのは、やはり日本との文化や考え方、価値観の差についてです。日本人は比較的内気で人見知りをし、他者と一定の距離感を保とうとするのに対し、アメリカ人は初めて会う人とでも積極的にコミュニケーションを図り、打ち解けようと努めている姿がとても印象的でした。これは大学内に限った話では無く、日常生活を送る上でも実感する場面が多くありました。例えば、レストランやカフェ、スーパーを利用する時です。お店に入ったり買い物で会計をしたりする時には必ずHow are you?と尋ねられ、挨拶のように店員と客が言葉をかわしていました。店員が皆とてもフレンドリーで、こういった会話が接客という枠組みを越えて日常的に行われる文化に感動するとともに、形式張った対応にとらわれ、どこか暖か味に欠けている日本の接客と比較してギャップを強く感じました。人の暖かさは、バスを利用した時にも実感しました。殆どの人がThank you!と運転手に声をかけて降車していき、運転手もYou're welcome.と答えていて、人との繋がりを大切にしているアメリカ人の姿が非常に印象的でした。

また、アメリカでの生活を通して日本で生活する中では決して分からなかった事が次々と発見でき、知見を深めるとてもいい機会になったと実感しました。特に強烈に印象に残っているのは、ポートランドで目にした多数のホームレスの姿です。アメリカでホームレス問題が深刻化しているのは知っていましたが、街にはあらゆる所にホームレスの人々が溢れ、少し路地に入るとゴミや残飯等で道が雑然としており、その光景は私の想像を遥かに超えるものでした。ホームレス問題解消を目的としたボランティア活動にいくつか参加した事もあり、日本には無くどこか遠い存在のように感じていたホームレス問題を身近に感じ、考える良いきっかけとなったと思います。アメリカにホームレスが多いのは、やはり自分の事は自分で決め自己責任で生活するという国民性が大きく影響しているのでは無いでしょうか。アメリカは税率も低く、オレゴン州には消費税もありませんでした。また、保険制度も充実しておらず、健康保険等は加入していない人も多いようです。その代わりに、医療費が日本とは比べ物にならない程高額であったり、社会保障制度が十分でなかったりとアメリカの自由主義が顕著に現れているなと感じました。

今回の留学で、日本では体験できない様々な経験を通し、アメリカ人の社交性や協調性を実感するとともに、日本の良さも改めて実感できるとても良い機会となりました。英語力を更にブラッシュアップする為に、学内のチューター制度や他の国際交流イベント等に積極的に挑戦していきたいと感じました。また、これから学生生活を送る上で、外見だけではわからない問題に対して、イメージだけで判断する事無く、物事を洞察し本質的に考える力を養っていききたいと思います。



(写真:お世話になった先生と)

「日本の私とアメリカの私」

理工学部知能情報システム学科 2年 谷崎俊介

今回の短期留学について色々書く前に、まずは私のことについて書かせていただきます。私は理工学部所属する2年生で、大学卒業後はアメリカの大学院でPh.D.を取得したいと考えています。留学したい理由はたくさんあるのですが、良質な教育・研究設備、金銭的負担の少なさ、アメリカでの刺激的な生活、などが主な理由です。普段は理工学部のSTEPsという組織に属し、留学生との交流や海外研修を行っています。

そんな私がパシフィック大学のプログラムに参加した主な目的は2つあります。1つは本格的な留学のための下調べです。もちろんインターネットで情報を得ることは可能ですが、大学の雰囲気や寮での生活など、実際に学生として生活してみないとわからないこともあると思います。2つ目は英語運用能力の向上です。3週間という短い期間でしたが、多少の効果はありました。とにかくたくさんの人に英語で話しかけようという姿勢が良かったのかなと思います。

次に、アメリカで私が実践したこと・感じたことについて紹介します。まずは本来の予定になかった授業に参加したこ

とについて。私の専攻はコンピュータサイエンス（以下、「CS」という。）なのですが、今回の滞在では英語の授業のみを受けることになっていました。いわゆる英語の4技能を鍛えるための授業です。授業は全部英語で行われるので勉強にはなるのですが、私は留学を希望していたということもあり、英語の授業だけでは物足りないなと思っていました。しかし、何とも幸運なことにアメリカに到着後まもなくして現地のCS専攻の学生と出会いました。それによってCSを担当する教授に直談判する手間が省け、週に2回の授業と研究室のゼミへの参加が許されました。もちろん授業やゼミは英語で行われ、話すスピードが速く、日常会話に比べると理解が難しかったです。しかしCSの知識はそれなりにあったため、スライドや配布資料を見た限り「やれないことはないな」と感じました。それと同時に「英語さえわかれば」という悔しい思いもあり、その思いは今の勉強の励みになっています。

次は、多くの人に英語で話しかけたことについて書きます。時間があればとにかく話しかけました。相手からすれば私は外国人ですから、不審に思われていたかもしれません。しかし英語の勉強のために来ているわけですから、そんなことを気にする余裕は私にはありませんでした。それにアメリカで出会う人のほとんどが帰国すれば2度と会わない存在、誰が私を気にするでしょうか。というわけでアメリカにいた間、私は図々しく振る舞いました。具体的には、食堂で暇そうにしている学生、パブでビリヤードをしている客などに話しかけることが多かったです。誰とも会っていない時間を作りたくなかったため、連絡先を交換した人と一緒に遊びや買い物に行く約束をスケジュールに組み込み、誘われたパーティや遊びには必ず行きました。英語を聞いたり話したりする機会が増えるだけでなく、スポーツやプログラミングなどの楽しい体験、食堂のご飯が無料で食べられるというラッキーな出来事もありました。これらの体験から私が学んだことは、やりたいことがあるならすぐに自分から行動を起こすべきだということです。それと、忙しすぎるくらいが楽しくてちょうど良いということにも気づきました。これらの発見は今の私の行動指針に大きな影響を及ぼしています。

次は、アメリカ滞在時の精神面に着目した内容です。アメリカにいた間、かなり忙しかったとはいえ一人の時間はいくらかありました。それに誰かと一緒にいるときでさえ、一人

の時間はあります。ということかという、人間は一日に何度も自分自身に対して話しかけるという行為、セルフトークを行っています。例えば「おなかすいた」や「何をしようかな?」などはすべてセルフトークです。私はこのセルフトークを英語で行う努力をアメリカに行く前からしていました。例えば、「I'm hungry.」や「What am I going to do?」のような感じです。なぜこのようなことをしているかというと、ネイティブのように「英語は英語で考える」ということをやりたかったからです。日本にいたときとは違って英語に囲まれた環境でしたから、セルフトークは英語にしやすかったです。特にネイティブと会話するときは意識してセルフトークを英語にするよう心掛けていました。また一緒にアメリカへ行った日本人の学生ともできるだけ英語で会話をしました。セルフトークを英語にすることで英語がスムーズに話せる感覚があったし、単純に英作文や英会話の練習にもなりそうなので継続していきたいと思います。セルフトークの他に不思議な発見があります。それは「英語を話すときの人格が普段と違う気がする」ということです。日本で留学生と話すときからこの事実気付いていたのですが、英語を話すときの私は比較的堂々としていて、はっきり意見を述べているなと感じます。疑わしいと思う方はインターネットで調べていただきたいのですが、多くのバイリンガルに関する研究が多言語話者の多重人格性を示していることから信憑性はあると思います。まだ私はバイリンガルとは言えないし、わずかな感覚程度なのではっきりとしたことは何も言えないのですが、面白い研究テーマなので継続して「日本の私とアメリカの私」を観察していきたいと思います。

最後に今回の短期留学のまとめです。今回のアメリカ滞在は3週間という短い期間でしたが、得られたものは大きかったと思います。留学の下調べとしてはもちろん、勉強に対するモチベーションやコミュニケーション能力などにも良い影響をもたらしてくれました。ここには書き切れないほどの思い出があり、最高に楽しかったことが一番良かったと思います。この体験で得たものを忘れずに毎日を過ごし、またいつか必ずアメリカに帰ります。



オレゴン・コーストのハイキングにて

「パシフィック大学プログラムを通して」

芸術地域デザイン学部芸術地域デザイン学科2年 江口史

私はパシフィック大学プログラムに参加して、多くのことを学びました。学んだことや体験したことはたくさんありますが、その中でも二つの要素に絞って話そうと思います。

最初に、現地での授業は、一方的に話を進める日本の授業とは違い、全て質問形式で、他の留学生のみんなとグループを組んで話し合いながら課題を進めました。とても面白く、楽しかったです。まず、リスニングでの授業ではグループで絶滅危惧種の動物について調べて、プレゼンテーションをしました。そのときもちろん英語でプレゼンをしたのですが、日本ではなかなか英語で話す機会がなかったので新鮮でした。文法の授業では、基礎から学びなおしましたが、意外と基礎からわかってないことがあったので、とても勉強になりました。リーディングの授業では、グループで一冊の本が課題として出され、話し合ったり、カフェでお茶しながら、その物語について話し合ったりしました。どの授業もすべて楽しかったです。

二つ目に、現地では、ぶつかりそうになる時にみんな「Sorry.」と言って微笑見合って通ったり、後ろを通る時には、「Excuse me.」、バスなどから降りるときも、「Thank you.」と言って去って行ったりなど、礼儀正しさや人々の関係性の密度の高さをひしひしと感じました。パディとの交流では食事に行ったり、ボウリングに連れて行ってもらったりなど、非常に楽しく過ごせました。パディの方は、英語が上手く話せなくてもどうにか聞き取ろうとしてくれる上に、自

らも日本語を話してくれたので、とても安心できました し、感謝しています。最後に、私は、フォレストグローブにあるギャラリーで、水彩画を教えてもらいに 行きました。そこで出会った同じように水彩画を学びに来ている生徒さんや、実際に教えてくれた先生に は心から感謝しています。そこでは、自分のことについて聞かれたりお互いの家族の話をした りなど、す ごく心地よい会話と雰囲気でした。その授業の終わり際に、先生から、「また遊びにきてね。私 たちは家族よ、私はあなたを誇りに思う。いつでも連絡してね。」と言われ、ハグをされ、少し泣きそうに になりました。本当にこのプログラムに参加してよかったと思います。

最後に、このプログラムに参加する前は英語を話せるかの不安や、授業についていけなかったらなど心配事が多くありましたが、実際 行ってみると、毎日が楽しく、充実していまし た。今までにこんな日々を送ったことがなかったのでこのプログラムが終わった今でも、 向こうでの生活に戻りたいと考える時もあり ます。自分は将来、アメリカに留学してデザイナーとして海外でも活動したいと思っていましたが、今回のプログラムを経てその目標が明確なものになりましたし、さらに楽しみになりました。



先生達との写真

「将来への道しるべとなった留学」 教育学部初等教育主専攻英語科 2年 大坪 輝

私はパシフィック大学プログラムに参加して、将来自分が何をしたいのか、それがはっきりした留学になったと思っている。私は現在教育学部に在籍しており英語を専攻している。留学をするまでは、将来英語教師になるか、それとも英語を活かした企業に就職するのか、どちらにするかとても悩んでいた。しかし、この留学で恐らく将来の目標が見えてく

ると思っていた。結果的に言えば将来英語を活かした企業、欲を言えば海外で働きたいという目標が見えた。

今回の留学は、私にとってはとても充実した留学であった。まずは、充実した環境。授業はもちろん、現地の方と話す時は全て英語である。佐賀大学での授業でも、教師が全て英語で話す授業はあったが、学生間の話し合いなどは日本語を使っていたため、どちらかと言えば日本語を使う機会の方が多い気がする。しかし、パシフィック大学の授業では教師が話す言葉はもちろん英語であるが、ディスカッションなどの学生間での話し合いも全て英語を使って行わなければならなかった。私にとってはとても新鮮な環境であった。しかし、なかなか自分が話したいことを英語で言えずモヤモヤする時が多々あった。日本でも海外の方と話す際、海外の方の話すことは、英語で話されてもある程度理解はできるが、それに対する自分の返答を英語で言う時に、言いたいことはすぐに浮かんでも実際にそれを英語で言うことが難しかった。恐らくそれは知らない単語が多すぎることに原因があると考えられる。それが海外でも出てしまい、自分の未熟さを痛感することになった。また、ルームメイトや同じ佐賀大学から一緒に参加している人達と話す時に、基本的に日本語で話していたことも、英語力上達のためにはあまりよくなかったと反省している。

授業外の生活でも、ボランティア活動をしたり、個人的に行きたい場所に行ったりと、充実した生活を送ることができた。ボランティア活動では幼稚園を訪問し日本語を教えたり、リサイクルする服を整理したりと色々な活動を行ったが中でも印象に残っている活動は「Tree Planting」である。この活動で私は Daniel という現地の学生とパートナーとなり、一緒に木を植えた。木を植えている時は常に英語で話すし、とても会話が弾みとても楽しかった。お互いサッカーが好きという共通点もあり、ボランティア活動後に連絡を取り合い、ポートランドにサッカー観戦にも一緒に行った。彼は私にとって現地で出来た1番の友達である。また、アメリカで行きたいことはしたいことはたくさんあり、分からないことがあれば現地の人に尋ねたりして解決しながら目的地まで行くだけでも英語を使いながら解決していける楽しさがあった。

そして今回の留学で1番私の印象に残っているのが、「Nike World Headquarters」に行ったことである。NIKEは私が個人的に好きなブランドであるが、その本社どころか世界本社がオレゴン州にあると知り、行くしかないと留学前から決めていた。実際に行ってみて、まず規模の大きさに圧倒されたし、なによりも歩いているだけで目に映るもの全てが鮮やかでとても興奮していた。NIKE 自体アスリートを支えるためのブランドであるため、スポーツの環境整備も充実しており、スポーツをしている私自身、余計に魅力的に感じた。そして、「ここで働きたい」と強く思った。NIKE の会社で働きたいとかそういう気持ちではなく、「この世界本社で働きたい」と思ったのである。このアスリートに特化した企業、ましてや自分が好きなブランド、そして、英語を使う環境、私にとって、この上ない企業だと感じた。

改めて今回の留学では、英語を用いて海外の人と話す楽しさを再確認したと共に、自分の未熟さ、無力さを痛感し、そしてなにより自分の目標を見出せた、とても充実した留学となった。NIKE の世界本社で働けなくても、英語を使い海外の方と交流のある企業に就職したいという道しるべとなった。まだまだ自分に足りないものは多くあるので、就職までの時間を英語に特化した有益な時間にできるように、これからの生活を送りたい。



Nike World Headquarters

「伝えることの楽しさと難しさ」

教育学部学校教育課程 2年 西江彩乃

私はパシフィック大学プログラムに参加して、とても貴重な体験をし、多くのことを学ぶことができました。25日間という短い期間で今までやったことがなかったことに挑戦したり、新しい環境で英語やアメリカの文化を学習したりすることができ、とても充実した日々を過ごしました。その中で感

じたのは自分を表現し伝え、相手のことを知ろうとするという積極的な態度の重要性です。これは日本でも分かっていたつもりでしたが、言語がうまく伝わらない海外に行くことで身をもって感じました。

まずスピーキング・リスニングの授業ではグループで意見を交換したり、プレゼンテーションをしたりしました。初めは英語で何を話せばいいかわからず、黙ってしまうことが多かったのですが、次第に間違ってもいいから自分の考えを伝え続けることが大事だと思い、発言するようになりました。発言することで、相手とコミュニケーションが取れるし、先生が自分の言いたかったことをどう伝えればいいかを教えてくれるので、自分にとってプラスになることばかりだということが分かりました。

そして、このプログラムではいくつかのボランティア活動に参加したのですが、その一つの「ツリープランティング」では現地の学生と積極的に交流することができました。その前にあったボランティアでは現地の学生との交流があまりできなかったのもので、この活動の際は自分から声をかけてペアになり、木の苗を植えながら、会話を楽しみました。話す時に英語でどう言えばわからなかったり、自分の発音が伝わらなかったりすることが多くありましたが、相手の学生がどうか理解しようと真剣に聞いてくれてとても嬉しかったですし、もっと英語の勉強を頑張らないといけないという励みにもなりました。

バディの学生やパシフィック大学の学生とも交流する機会が何度かありました。初めて会った時は緊張してしまい話しかけることができませんでしたが、一緒に買い物に行ったり食事をしたりするうちに最初よりも自然に話すことができるようになりました。相手が何を言っているのかを聞き取るのは難しかったのですが、話しているうちに理解できるようになって、相手が話していた内容についてさらに聞いたり、自分の気持ちを伝えたりすることができました。

ハイキングでオレゴン・コーストに行った際には、一緒に行ったガイドの方が日本で日本語を勉強したことがあるということで、歩きながら日本について話したりしました。また、植物の名前などを英語でなんていうか、なぜそのようにいうかを教えてくださりとてもためになりました。ハイキングは歩く時間が長く、会話する機会がたくさんありまし

た。そこで感じたのは自分の英語で話せる内容の少なさです。伝えたいことがあってもなんと伝えれば伝わるのかが分からず黙ってしまったり、どんな話をすればいいのかが分からず準備不足を感じたりしました。さらに留学前に佐賀大学の留学生と交流した時にも感じていたのですが、あとで思い返すとなんと伝えればよかったのか分かることでも咄嗟に言わなければならない時になんと伝えればいいのか分からなくなったり、文法がおかしくなってしまうことが多くありました。アメリカで現地の人と長い時間話すことで、日本にいる時よりも自分がどれだけ英語を話せていないのかということを痛感しました。

このような大学での生活以外でも、休みの日に出かけた際に自分がどれほど英語を身につけられていないかを感じる場面が多々ありました。レストランやお店で店員の人や隣の席の人に話しかけられても単語や短い文章でしか答えられず、その後でとても悔しい気持ちになりました。

このプログラムに参加するまでは、これほどまで英語を話さなければならない状況になることがあまりなかったのも、初めてそのような環境で英語を使って、自分が実際のコミュニケーションで使える英語の少なさを実感しました。今後はこの留学で感じた悔しさをもとに、佐賀大学の留学生との交流などを通して実用的な英語を習得できるように学習に励み、将来小学校の教師になった際にこの経験を生かせるようにしていきたいと思います。



ツリープランティングで撮った写真

「日本でできない事をしてみる」

農学部生命機能科学科 2年 宮崎真実

私は将来の就職や、研究を海外でしてみたいと思いパシフィック大学プログラムに参加しました。そこで学んだことが二つあります。

一つ目は英語です。日本人の英語とは全く違う発音や表現があったことです。また、日本人同士では単語だけで通じる事がありますが、きちんと主語、述語を使わないとその意味をくみ取ってはくれませんでした。質問したい時も同様に語尾を上げるだけでは通じませんでした。単語の量が少ない事にも気付かされました。しかし、わからない単語は聞いたら丁寧に友達や店員さん、先生は教えてくれました。

授業においては高校で習った事が多くありましたが、文法を英語で教えられる事自体がとても勉強になりました。宿題も英語で言われるので聞き逃さないようにするのが大変でした。

日常生活においては分からないことはきちんと聞く事が大切だと思いました。料理名や食材をきいたら丁寧に教えてくれたり、スーパーなどでも機械の使い方や買い方も丁寧に教えてくれました。

二つ目は文化の違いを感じました。ボランティア活動が身近にあったことです。プランティングツリーという何もない土地に学生や地域の人たちで木や花を植えるボランティアやホームレスのために集められた服の整理がありました。その団体は定期的に服や食べ物を配る活動をしていて、日本にもあるとは思いますが、とても身近なところにあり要らなくなった服などがたくさん集められていました。また、このような活動に限らずにボランティアに参加している人が沢山いる事にも驚きました。日本ではボランティアは身近に感じられないし、テレビなどで見るだけで大変そうだというイメージがありました。アメリカでは気軽に参加でき、たくさんの人と話す事ができました。

ここで私が留学して良かったと思うことはたくさんあることを知れたことです。言語が違うのはもちろんだけど考え方や大学のスタイル、街並みの違いを知れました。知り合った人たちはしたい事が明確に決まった人まだ決まってない人がいて、特に決まってない人は興味のある授業をとって自分の進路を考えていました。この点は少し日本とは違うと感じました。また、自分の考えを共有する人も多く感じられました。日本では特定の人だけにのみ相談などをする事が多くあります

が、出会って3週間の私たちにもたくさんの意見を伝えてくれました。私も何か言おうと思っていたけど考えるので精一杯でした。

最後に、自分から積極的に行動をすることの大切さを知りました。最初は周りの外国人から話しかけてくれるけど、自分から話さないと外国人と話す機会はだんだん減っていきます。私は2日目に留学で来ていた別の大学の子と地元の子に連れられてポートランドに行きました。2人が声をかけてくれてバスの乗り方やポートランドへの行き方がわかり、友達になりました。誘われたら積極的にについていってみたいと思います。また、イベントなどにも積極的に参加することも大切です。寮にいただけでは人と話すこともないです。毎週金曜日にはムービーナイトといっている人々と映画を見たりしました。また、大学にアウトドアパースーツといっているいろいろなアウトドアを体験できるイベントを主催している機関がありました。ハイキングやカヌー、スキーなどがあり私はスノーボードをしました。インストラクターもいてもちろん外国人だったけどわかりやすく教えてもらいました。そこで会話もできたのでよかったです。しかし、定員があるのでなるべく早く自分の興味あるものがあれば行動にうつしてみるといいと思います。日本でできるイベントもありますが、規模など日本とはとても違う体験が出来るのでぜひ体験して欲しいと思います。



ムービーナイトの後に撮った写真

「違い」

経済学部経営学科 1年 佐藤将也

私はこの春、アメリカへ海外研修に行った。まずその理由として、私は自分の英語力を上げたかったということ。そして、それと同等にアメリカの空気、文化を肌で感じたかった

ということだ。私は小学生の頃から映画等の影響でアメリカに興味があり、その文化について強い憧れを抱いてきた。将来移住したいと思う程だ。今回の研修の中でその「憧れ」がどのように変化したのかは後に述べるとして、本題である「研修での成果」について先に話す。

私がこの研修の中で得たことは「日本の側面」である。アメリカの文化に触れる中で、「日本ではこういう文化は無いな」と考えたり、逆に「どうしてアメリカにはこういう文化が無いのだろう」と考えたりすることを繰り返して、日本の新たな側面が見えたのである。それらが見えたきっかけとなった事象をいくつか話していく。

まず1つ目に、アメリカのバリアフリー設備である。パシフィック大学の建物の入り口の壁には車イスのマークがついたボタンが設置されており、それを押すと自動でドアが開くのだ。そして建物内にはエレベーターがある。歩道にも工夫がされており、学内の道の曲がり角は(写真)のようになっている。これは角の内側で車椅子が脱輪しないような工夫である。また、バスにもバリアフリーを見ることができた。バス車内の椅子は折りたためるようになっていて車椅子用のスペースが楽に確保できるのだ。この話は現地で出会った日本人留学生に聞いた話だが、日本のバリアフリー化は遅れているらしい。彼も障害を持っている。言われてみれば、佐賀大の建物にはエレベーターが無いところも多い。この点は日本も見習うべきだろう。

2つ目にボランティア活動への参加人数の多さである。これは植林活動に参加した時に感じたもので、参加者はパシフィック大学の学生が主だっただろうが、中には小学生も混ざって参加していた。もしこれが日本であればどうだろう。自分に置き換えたとして、参加するだろうか。経験上、日本でのボランティア活動への参加人数は少ないように思える。ではなぜ植林、またはボランティア活動に多くが参加するのか。自分なりの推測であるが、ここには学生の環境への意識が関係しているように思える。というのも、学内のごみ箱はリサイクルできるものとできないものに分けられていて、また、プラスチックは大抵4回、5回再利用されている。それに関連してより環境を考えるきっかけがあると考えられるからだ。

3つ目は日本のマナーが通用しない点だ。これを感じたのはバス車内と電車を待っている時だ。日本と違い、アメリカではバスの中でも大声で堂々と電話ができる。しかし、周りの人は何も言わない。同様に、電車を待っていた時、隣の人が大音量で音楽を流していたが、誰も何も言わない。もちろんアメリカではそのような行為は迷惑として考えられてないからなのであるが、やはり日本人である私からすると違和感でしかなかった。この経験は私がアメリカを考える上で大きな役割を担っている。私が思っていたアメリカというのは「自由」であったからだ。思えば、「日本人は他人の目を気にしすぎている」と海外の人から言われている記事を見たことがある。それは日本の教育では「統一」を意識させられ、個性はあまり重視されてないからだと思う。どちらが良いという話ではないが、個人的には日本は不自由だと思う。

3週間アメリカで生活して、アメリカと日本それぞれの良さが見えた。上記の経験や気づき以外にも沢山驚きがあった。結果、アメリカを通して日本を見つめる事ができ、この事はアメリカを知る事と同じくらい意味があったと思う。日本は自分が思っていたよりも優しくない国であった。1つ目に話したバリアフリーの面でもそうだし、個人個人の交わりについてもそう。アメリカでは日本にいる時より「ありがとう」という言葉を耳にした気がするし、主にバスでは初対面の同士の話す場面をよく目にした。バスを降りる時には、日本では運転手が一方的に「ありがとうございました」という場面をよく見るが、アメリカではほとんどの人が相互にそれを言っていた。また、運転手によっては「Have a nice day」などを付け足す人もいた。何だか日本よりも親切的な印象だ。またアメリカの方が優れている点はもう一つあり、それは信号機のない横断歩道で車がすぐに止まってくれるところだ。日本では車が譲ってくれるまでに長くかかることもよくあるが、アメリカで生活している時にそんなことは一切なかった。これらの点は日本でも取り入れるべきであると思う。

逆に日本が良いと思う瞬間も多々あった。例えば街中の美しさや路上生活者の数である。ポートランドでは歩道にテントを張って生活している人も多く、治安は良さそうではない。特に夜になると街の空気は一変する。その点日本は治安が良く住みやすい。

結局、私のアメリカへの憧れは薄くなったというのが本心だ。「百聞は一見に如かず」である。これまでは、アメリカの方が優れていて、日本は劣っているとばかり思いこんでいたが、それは間違いであった。私は今回初めて日本を出た。そしてこれまで気付けなかった日本の良さを見つけた。両者のフィルターを通した新たなアメリカ、日本の「見方」を得たのだった。



学内の歩道の曲がり角

「3週間での経験」

理工学部応用科学コース 1年 伊東周昌

私はパシフィック大学プログラムに参加して、本当に様々な経験を得ることができました。ボランティア活動のひとつである「ツリープランティング」では、現地の学生と交流しながら活動を楽しむことができました。授業では、15人程度の少人数クラスで課題も多く、とても充実した内容でした。文法などの解釈の仕方が日本で学んだものとずれがあり、勉強になりました。

大学は複数の寮を所持していて、それらの寮の中には卓球台やビリヤード台を備えているものもありました。卓球台やビリヤード台が置かれている場所そこは共同スペースだったので、暇な時間にジャパクラブの学生やそのほかの現地の学生と、卓球やビリヤードで遊ぶことができました。

また、パシフィック大学の付近には様々なお店がありました。その中に、The lazy eye というビリヤードができるパブがありました。私は、日本でもよくビリヤードをしていたので、興味本位で入って遊んでいました。その時に一人でプレーしている現地の男性がいたので、一緒にしようと声をかけたところ、快く受け入れてくれました。彼は Vlyon という名前の36歳のアメリカ人で、仕事帰りによくそのお店に訪れ

ているそうです。初めて一緒にプレーしたときに連絡先を聞いたので、自分から連絡を入れて週に2〜3回ほど二人でビリヤードをして遊んでいました。英語の勉強は自分のためだけにしかしてきませんでしたが、Vlyon と会話する中で、もっと完璧に聞き取れて、完璧に自分の言いたいことを相手に伝えられるようになりたいと思うようにもなりました。私が、毎回お店のビリヤードのスティックを借りてプレーしていたからか、彼が以前使っていたスティックを「この短期留学のアメリカからの記念品だ」とプレゼントしてくれました。自分の英語にあまり自信がなく、関係性を築けているのかどうか心配でした。なので、この時に少なくとも最低限の関係性が築けていたのかなと感じるとともに、少しの達成感を得ることができました。

現地の学生や、Vlyon や The lazy eye の常連さんと話す機会が日に日に増えていくにつれて、感情や伝えたいメッセージを伝えたいという気持ちが大きくなりました。これは、今までの受験勉強などを通しての英語の学習の時の動機とは明らかに異なっていて、すごく新鮮なものであり大きな収穫であったと考えています。

また、3週間での数々の濃い経験を振り返った時に、もっと長い期間自分の身を似たような環境に置きたいと考えるようになりました。なので、この短期留学は、1年以上の長期留学を視野に入れ、大学院での正規留学を目指すことを決めるきっかけになりました。



Vlyon と The lazy eye での写真

「言葉にすること・行動することの大切さ」

教育学部学校教育課程 1年 村島瑞葵

私はパシフィック大学プログラムに参加して、初めてのことで・多くのことを体験しましたが、特に「言葉にすること・行動することの大切さ」について学び、考える機会になったと思いました。

平日には、他の日本の大学生と一緒に、2人の外人の先生から教わりながら、三種類の授業を受けました。

まず、speaking の授業では実際にグループをつくりプレゼンを行ったり、出されたお題について全て英語で会話をしたりしました。日本語を少しでも喋ったら注意をされるので、だんだん自分自身も英語を喋らなきゃという意識が変わっていきました。日本でも英語の授業はあるし、自分で英語を考えてプレゼンをしたりということはあるけれど、文を考えるとなく、すぐに英語で会話をしたりといった経験があまりなかったので、この英語は合っているのか・自分が言いたいことは相手に伝わっているのかなど不安でした。それでも言葉にしていくうちに自然と会話ができるようになっていき、そういった面でも言葉にすることは大切だと思いました。そして、grammar の授業では予習がかなり大事で、課題でわからなかったところを授業の中で質問するという流れでした。最初は全く質問をせず、ただ授業を聞いて必死についていくという感じでしたが、それを見てからか、担当の先生が机ごとに当てるようになりました。課題をするときも、当てられるから質問する内容を考えておこうと思うようになり、そして自然と自分から発表したり質問したりするようになっていました。最初は自分自身も質問するほどでもないかなと躊躇っていたけれど、どんなに簡単なことでも丁寧にわかりやすく先生が解説してくれていたこともあって、最終的にはこれを質問してみようというように積極的な姿勢になった気がします。Reading&writing の授業では答えが曖昧でも、自分の考えを述べたらすごく褒めてくださって、自信がない答えでも発表しやすいなと感じました。どの授業も最初は緊張していたけど、積極的に授業に参加することがとても大事ななと思いました。間違いを気にして恐れるばかりではなく、挑戦してみることの大切さをわかった気がします。また、教師を目指す上でも、先生方の褒め方や生徒が主体的になって発表するように、と捉えられるような授業の進め方もとても勉強になりました。

授業以外にも、ボランティアに数回参加しました。ホームレスの方たちに寄付する服の仕分けや食料の準備をしました。木を植えるボランティアも行いました。ボランティアに参加してみて、誰かのために行動することはいいことだと改めて思えました。どのボランティアも結構きつい作業だったし、実際にホームレスの方と関わったりしたわけではなかったけれど、小さなことでも誰かのためになっていることだと考えると、実際に行動することは大事だと思いました。ボランティアに限らず人のために行動することの大切さにも気づくことができました。

授業やボランティア以外の時間は自由だったので、バスに乗って出かけることが多かったのですが、特にバスを降りる時に、みんな thank you と大きな声で言って降りていたことに驚きました。それは日本では見られない光景で新鮮に思えました。バスに乗るうちに、気づけば自分自身もそう言うようになっていました。日本の普通のバスでそういう風に言ったことはなかったし、当たり前前の光景ではなかったのも、それを聞いたときや自分が言葉にしているときはすごく気分が良かったです。きちんと言葉にするアメリカ人の様子を見てとても刺激を受けました。

授業を通して、アメリカ人と交流を通して思ったことは、緊張とか不安を感じて何も行動しないことが一番ダメだなと学びました。この留学ではたくさんのことを経験し、学び、すごくいい時間を過ごせました。留学も最初は怖がって避けていたけれど、留学しようと決めて行動したこと、留学中も話しかけてみようと思えるようになったこと、留学を終えた今、また留学にチャレンジしようとしていること、自分自身がすごく成長した気がしました。本当にプラスにもマイナスにもいい経験ができたと思いました。



一緒にバーベキューをするイベントに参加して、
パシフィック大学の学生と交流した時の写真

「アメリカ留学で学んだこと」

医学部医学科 1年 豊原本奈

私はパシフィック大学プログラムに参加して、多くのことを学び、感じることができました。元々は英語のスキルを上達させたいということが主な目的でこのプログラムに参加したのですが、実際に現地に行ってみると、英語のリスニング、ライティング、リーディング、スピーキングの練習はもちろん、それ以外の多くのことも現地での活動、人々との触れ合いを通して、見て聞いて体験して、自分の視野を広げることができました。

今まで、授業や習い事で英語を使ったりしたことはあったのですが、実際にネイティブスピーカーの人達と会話するという機会はあまりありませんでした。そして今回の留学で、実際にネイティブの人達とコミュニケーションをとってみて感じたのは、自分が言いたいことを言葉にすることの難しさでした。リスニング、ライティング、リーディングはある程度できたのですが、いざ英語で会話をするとなると、言いたいことがパッと口に出ず、頭の中でしばらく考えないと出てこないということが何度もありました。そこで痛感したのは、経験の少なさです。英語での会話に慣れていないために、こういったことが起こるのだと思います。そこで、日本に帰った後もスピーキングの能力をもっと磨き、いつかまた英語圏の国へ行行ってリベンジしたいと思いました。

授業以外にも、パシフィック大学のプログラムではたくさんのボランティア活動をしました。その中でも印象に残っているのは、フォレストグローブでのフードバンクやクローゼットグリーン、ツリープランティングです。

フードバンクというのは、フォレストグローブやその周辺にいる、ホームレスの人達や経済環境が厳しい家庭の人達に食料を提供する活動のことです。今回はパシフィック大学の門の近くに机を並べ、その上に野菜や果物、飲み物などを並べることをしました。クローゼットグリーンはフードバンクと同様に、その地域のホームレスを含めた貧困層の人達に使わなくなった衣服を提供する活動のことです。私達は衣服が提供される教会に行き、そこで服やズボンを仕分けする作業をしました。この2つのボランティア活動で、私はフォレス

トグローブの人達の社会的弱者の人達への優しさに感動しました。嫌な顔1つすることなくボランティアをしており、同じ市民として支えていこうという思いが伝わってきました。フードバンクやクローゼットグリーンは教会などに提供ボックスが設けられていて、多くの人がボランティアに参加できるように工夫されているのだと思いました。

ツリープランティングは植木活動のことで、ここでは、パシフィック大学の近くにあった荒れた土地にチームに分かれて様々な種類の木を植えました。最初は私達だけが植木のボランティアに参加するのだと思っていましたが、実際は100人以上のパシフィック大学の学生が参加していて驚きました。ツリープランティングはボランティアなので、それをしたから何かが貰えるというわけでもないのに、これほど大勢の学生が半日かけてたくさんの木をボランティアで植えている姿を見て環境意識の高さを感じました。アメリカに行く前から、オレゴン州の環境問題に対する意識が高いということが調べてみて分かっていて、具体的にどのような取り組みをしているのか知りたいと思っていたのですが、このツリープランティングに参加してみて、州民の一人一人が環境を守り、さらに良くしていこうという思いがあることが分かりました。自分がこのパシフィック大学留学プログラムに参加する目的の1つである、現地の環境問題の取り組みを知ることについて、実際にその取り組みを体験することができ、その目的を果たせたことが本当に良かったと感じています。

上記以外の活動で、ポートランドのマーシーコープスというボランティアを主に行う会社に行った際には、その地域の貧困層への支援だけでなく、世界中の、助けを必要とする人達への支援も積極的に行なっているということを知り、オレゴンの人達のボランティア精神は、私が思っていたよりも強く、困っている人達を助けたいという彼らの気持ちは私達日本人も見習わなければならないと感じました。

ボランティア活動以外でも、現地の人達との触れ合いで学んだことが多くありました。強く印象に残っているのは、フォレストグローブにある、ラーメン店で働いていた親子です。店主であるお父さんは日本に50回以上行ったことがあるそうで、私達と日本の話などをして盛り上がりました。娘さんと息子さんも何度か一緒に日本に来たことがあるそうで、私達

と話をする時は目を輝かせながらその時の話をしてくれました。日本以外にも中国やタイなどの多くの国と一緒に旅行してきたそうです。そして、お父さんは私達に「小さいうちにいろんな国へ行って、それぞれの文化を見て体験することで、大きくなった後に、自分が生まれ育った文化とは違う文化への無理解や差別がなくなる。だから僕は娘や息子達が小さいうちに、一緒にいろいろな国へ旅行するんだ」と熱く語ってくれました。そういう考えを今まで意識したことがなかった私はお父さんのこの言葉に胸を打たれました。私も自分に子供ができたなら、小さいうちにいろいろな国に行かせて、異文化体験をさせたいと思いました。そうして異文化も受け入れられるような人間になってほしいです。

パシフィック大学への留学で経験したこれらのすべての出来事を通して、ボランティア精神、困っている人を助けること、環境保全に対する私の視野を広げることができました。この留学に参加することができて、また、オレゴンの人達と会うことができて本当に良かったです。



親子がいたラーメン店

「1ヶ月間のアメリカ留学を経験して」 経済学部経済法学科 1年 大内萌々香

私が今回のパシフィック大学プログラムに参加しようと決めた一番のきっかけは、自分で物事を考えたり意見を伝えたりすることが苦手な自分を変えたい、家では何もかもを親に頼りきりだった自分を少しでも自立させたいと思ったからです。応募をしてからも心配や不安の気持ちの方が期待や楽しみという気持ちよりも大きく、応募しなければ良かったかなと思ったこともありました。しかし、親元を離れて経験したアメリカでの留学生活は、今までの人生の中で一番自分の精神面を成長させることができた1ヶ月間だったと感じている

し、一歩踏み出して留学への参加を決めて良かったと思っています。

アメリカで実際に受けた授業は、グループで話し合ったりプレゼンをしたりする機会が多くありました。また、一緒に授業を受けていた学生が、授業中先生が質問したことに対して何度も発言していました。日本より発言の機会が多く、授業の受け方が積極的であって、私はとても刺激を受けました。

また、私たちは大学内にある寮で生活したのですが、朝昼晩毎日3食自分で考えなければならず、洗濯も自分でしなければなりません。実家暮らしで何でも親に頼りっぱなしにしていた私は、1ヶ月間も自分の力で生活することが初めてでした。それらは思っていたよりも大変で、それらを親は毎日私のためにしてくれているのだと思うと、親への感謝の気持ちにも改めて気づかされました。

また私は、異文化を肌で感じたい、自分の英語力を向上させたいという目標を立てて、今回のパシフィック大学プログラムに参加しました。アメリカで生活する中で、アメリカの日本との違いをたくさん感じました。私は休日に電車やバスを利用して街に出かけることが多かったのですが、アメリカでは時刻表通りに公共交通機関が動くことはほとんどありませんでした。いつも時間通りに到着する日本の電車やバスに慣れていたのも、日本のありがたみを感じました。また、レストランなどでは渡すチップの額を自分で決めることができました。私は日本ではチップを渡す習慣がなかったので、この習慣に驚きました。

また、私は英語力を向上させたいと強く思っていたので、自分から積極的に多くの人に話しかけよう、できるだけ英語を使って発言しようと思った。しかし、思っていたよりもこれらを実践することは容易ではありませんでした。中学高校の6年間の英語の授業で大体の英単語や文法事項は学んできたし、私は単語を覚えることや文法の問題を割と得意としていたので、それらを使えばコミュニケーションが取れるだろうと軽い気持ちで考えてしていました。しかし、相手が言っていることを理解し、また言いたいことを英語で表現することは難しく、自分の英語の拙さや文法問題だけできいてもらえないということを痛感しました。ここまで英語を話せないことに、授業の中や現地の方と話すとき伝えた

いことがあっても単語や文をなかなか思いつけないことに、とても悔しさやもどかしさを感じ、その悔しさからもっと英語を話せるようになりたいと強く思うようになりました。1ヶ月間で、最初の方に比べて英語を聞き取れるようになったと思います。英語で言われたことを少しずつですが理解できるようになっていくのが私にとってとても嬉しい成長でした。しかし英語を使って相手と話すことに対してはまだまだだと思いました。私は今回の留学がもっと英語を学びたいと思うきっかけになりました。もっと多くの人と英語を使ってコミュニケーションを取りたいです。私は将来、英語を使って仕事をしたいと考えています。そのためにも、長期留学をしたいという次のステップも見つかりました。今後の大学生活では英語の勉強をしっかりと頑張り、一つ一つ目標を実現させていきたいと思います。



Reading&Writing のクラスにて